

# ブラジルの歯科(その1)



星 淳子  
(H&A コンサルティング代表)

## センシティブな歯

我々は日頃から歯のケアを欠かさず、虫歯などを予防している。既に歯のことは熟知しており、今更歯のことなど…と思われるかもしれないが、「灯台下暗し」は、歯にも当てはまるかもしれない。今回は、そんな身近な歯をブラジルと日本との比較という観点から2回に分けてまとめてみる。

歯は体の消化器官の一部で、その入口に位置する。一言で歯と言っても役割は様々であり、例えば前歯は食べ物を切る役目、そして奥歯で砕いて、食道、胃へと送り出す。歯でしっかりと噛み砕かないと胃への負担も大きくなる。また歯が欠けると、口腔内のバランス(噛み合わせ)が崩れ、筋肉、喋り方にも影響が出てくる。

歯が欠ける病気としてよく知られているのは虫歯だろう。しかし歯の病気は年齢によってその性格が変わるため、虫歯だけ予防していれば良いというわけにはいかない。確かに子供の頃は虫歯になりやすいが、年齢が高くなるにつれ、歯周病や歯肉炎といった歯茎の病気が多くなっていく。

また、歯は大変センシティブでストレスに弱いことは意外に知られていない。例えば、海外へ赴任する前に、歯を全てチェックしたはずなのに、なぜか現地へ行くとう歯の痛みが出るケースがある。不慣れた異国での歯痛は辛い。歯科医を探すのも一苦労だが、病院で言葉が通じるかも不安になる。実は歯はストレスや食べ物の変化、生活リズムの変化にとっても敏感なため、海外へ行って突然歯が痛くなることは決して珍しくない。私のクライアントにも、そのような方がおり、症状にあった専門医を紹介したことがある。

## ブラジル国民の歯への意識

格差が残るブラジルだが、歯に対する国民の意識については大きな格差はないように感じる(歯のケアに使っている予算に格差はあると思うが…)。場所を気にせず、洗面台で歯を磨いている人を多く見かける。しかも、歯ブラシだけではなく、デンタルフロスもセットで使う人が多い。結構時間がかかるため、トイレで手を洗いたくても、なかなか洗えないといったことも珍しくない。

国民の多くは歯の病気だけでなく、美容歯科(歯並び、ホ

永久歯の抜歯原因



公益財団法人6020 歯医会  
「第2回永久歯の抜歯原因調査(2016年)」

ワイトニング等)への関心も非常に高い。ブラジルでは人を見る際、視線を口元に移すことが要因と考えられる。

ある記事によると、日本人は目を見れば相手の感情がわかるため、鼻から下はあまり見ないとのこと(注1)。確かに、日本の多くの絵文字は目を強調している。一方ブラジル人を含む欧米人は、目元だけではなく、口元にも注目し相手の感情を察知するため、常に見られる歯を気にするのだろう。ブラジルで生まれ育った私も、日本での生活が長くなったが、未だに相手の口元を見る癖がある。三つ子の魂、百までである…。

## ブラジルの歯科医

ブラジルで歯医診療を受けるには、歯科医院の予約が必要になる。治安の関係から飛び込みで歯科医に診てもらう事は、ほぼ不可能と考えておいた方が良く、予約後に歯科医院へ行くことが一般的だ。また患者一人あたりの診療時間が平均1時間と長く、一人の医師が診る患者数は1日平均10~16人と少ない(コロナ禍では、感染予防のため、さらに一日の患者数を減らしている歯科医院が多い)。日本の歯科医院を受診した際の印象は、診療時間が短いというものだったが、日本では平均24.1人(2014年)(注2)になっている事実はその印象を裏付けるものかもしれない。

ブラジルの歯科医は時間をかけ、患者に多くの質問をし、たくさん話を聞く。これは、症状を理解し、原因を見極めるだけでなく、患者との人間関係を築き、患者の求めを正確に理解する姿勢の表れである。歯科医と患者が、治療を通じて親友関係になる事はさほど珍しくない。

ブラジルでは、女性の歯科医の割合が多く、5割以上が女性歯科医(CFO- conselho federal de odontologia)である。他の仕事と比較し、勤務時間に柔軟性を持たせやすいことが理由の一つだ。一方、日本の場合は23.3%が女性、男性が76.7%(注3)であり、まだまだ男性社会と言える。私の同級生(ブラジルの歯科大学)も、同学年80人中男性はたったの12人と、圧倒的に女性が多かった。

歯科医院内の様子も日本とブラジルでは異なる。ブラジルでは歯科衛生士という資格や職業が存在しないため、治療は歯科医師が1人で行うのが一般的である。ただし、「tecnico em saude bucal, TSB」及び「auxiliar de saude bucal, ASB」という職業もあり、彼らのサポートを受けながら治療を行う歯科医も多少いる。これらの職業には、専門学校で学んだ後に就く者が多く、中でもTSBは日本の歯科衛生士に近い職業に思える。



櫻井聖子  
(フリーランス翻訳者)

## ブラジルでは果物は買わないもの?

挙げだしたらきりがないブラジルで食せる数々の果物。筆者を含む無類の果物好きには天国、今回はブラジルならではの果物にまつわる体験エピソードをご紹介します。

ある日、ブラジル人の同僚が大量のマンゴーを職場に持って来てくれた。聞いてみると、日本大使館の斜め前のイスラエル大使館の前に落ちている熟れたマンゴーを同大使館警備員にウィンクしながら、通勤途中で拾ってきたという。ブラジルには、100万本にも及ぶ果樹が街のいたるところに植えてあり、マンゴー、ドリアン、レモン、グアバ、アボガド、ブラックベリー、柘榴などの果物が採り放題なのだ。ブラジルは植物区分においてセラードに位置しており、今注目を集めているアサイー、クアスなどのアマゾン産の果物とは違った種類が豊富で、果物アイスやジュースとして食せるのも楽しい。ちなみに、このマンゴーは子供の手のひらにのるくらいの小振りの大きさで、果実の部分は大きくない。ブラジル人に言わせるとこのマンゴーは食べるものではなく、皮をむいて吸うものらしい。こういったブラジルに植えられている果物の場所と収穫時期を表す果物地図なるものが作られたりしており、たまにスーパーの空袋

を持って集めている人を見かけたりすることもある。でも、ブラジルでは路上駐車に注意。これらの木の下に車を置いてしまうと、幸か不幸か上から食べ頃の大きな果物が落下して車にへコミをつけかねないこともあるのでご注意ください!

10月のある日、サンパウロのイピラプエラ公園に散歩に行くと、ある木の回りに人が群がっている。近づいてみると、木の幹に気持ち悪い黒紫の実がなっていて、皆それをビニール袋に入れたり、食べたりしている。ご存知の方も多いと思うが、ジャブチカーバ。不思議なことにブルーベリーの5倍くらいの大きさはあるという実が木の幹から直接なっているのだ。ビタミンC以外にも強力な抗酸化物質を多く含むこの実をブラジル人は生で食べる他に、ジャムなどを作っているようだ。生では食べたことはなかったが、チョコレートやアイスなどブラジルならではの味を楽しんだ。

この記事を書くにあたって、サンパウロでも自由に取れる果物の場所が掲載されているHPが複数見つかった。プロの域に達すれば、もしかしたらブラジルでは果物は買うものではなくなるのかもしれない!?

## ジャーナリストの旅路

# ブラジル9年目に思う

市川亮太  
(時事通信社サンパウロ支局長)

前回の当欄登場は2015年3月号、ロサンゼルス特派員時代だった。元サンパウロ特派員として、当時担当していた米大リーグを無理やりブラジルに結び付けた原稿を書いたが、まさか三たび寄稿することになるとは思ってもみなかった。

17年にロスから横濱で2度目のサンパウロ特派員を命じられ、この6月、ブラジル通算9年目に突入した。商社やメーカーでは珍しくないが、特派員としては恐らく過去最長となる。めっきり白髪も増えてベテランの風格も漂っていることから、しばしば人から「さぞかしブラジルや中南米には精通しているんでしょう」と聞かれる。でも答えは「否」だ。

31歳で来伯した1度目は、今の日経新聞の外山君や読売新聞の淵上君のように、若さと好奇心に満ちあふれ、元気よく仕事をした(はずだ)。任期満了時にはいっばしの中南米専門家になったつもりだった。特に通信社は、ジャーナリスティックな視点というよりは事象を可能な限り単純化し、記事を速くコンパクトに読者に届けるのが仕事。ならば、そのくらいがちょうどいいのかもしれない。

しかしアラフィフに突入すると、ブラジル一帯をとっても複雑怪奇で不可知だなぁとしみじみ思う。前回の離任直前にブラジル人の嫁をもらい、日本で子供をもうけ、一昨年インテリオールに彼らの家を買った。ブラジル人に深く関わるにつれ、一生かけても完全理解などできないことが分かってきた。当時毎晩のように

飲み歩き、偉そうな戯れ言を我慢して聞いてくれた朝日新聞の和泉さん(退職、元足利市長)や日経新聞の岩城さん、NHKの中嶋さんらに謝りたい気持ちでいっぱいだ。

さて、「ジャーナリストの旅路」は終わったが、字数が余ってしまった。仕方ないので2度目の赴任で気付いた当地の「変化」を記すことにする。

仕事仲間には周知の事実だが、筆者は強盗や車の窃盗など、やたらとブラジルで犯罪に遭っている。前回赴任時は拳銃強盗が中心だったが、今回は強盗はたった1度。それも、奪われたのは腕時計と装飾品のみで、財布は最初から見向きもされなかった。前回は街中で現金と小切手しか通用しなかったが、今はガム1個買うのでさえ、デビットかクレジットカードのカード決済。現金を出すとお釣りがないと受け取りを拒まれる時代だ。強盗の方も、被害者がまとまった現金を持っているとは期待していないのだろう。

一度は「振り込め詐欺」に引っかかりそうになった。突然携帯が鳴り、ポルトガル語で「お宅の息子が事故に遭った」。日本ならば相手にしないがパニックに。焦ってやり取りをしているうち突然正気に返り、電話を叩き切った。つい最近、SNSの乗っ取りと「身代金」要求も経験した。これも叩き切った。ブラジルでは政治も経済も社会も10年でさほど進歩していないが、少なくとも犯罪は着実にアップデートされているようだ。

(注1) 日本と欧米、マスク着用で心理面に差 目は口ほどに物を言う yahooJapan.news  
(注2) https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/e.pdf  
(注3) https://www.jda.or.jp